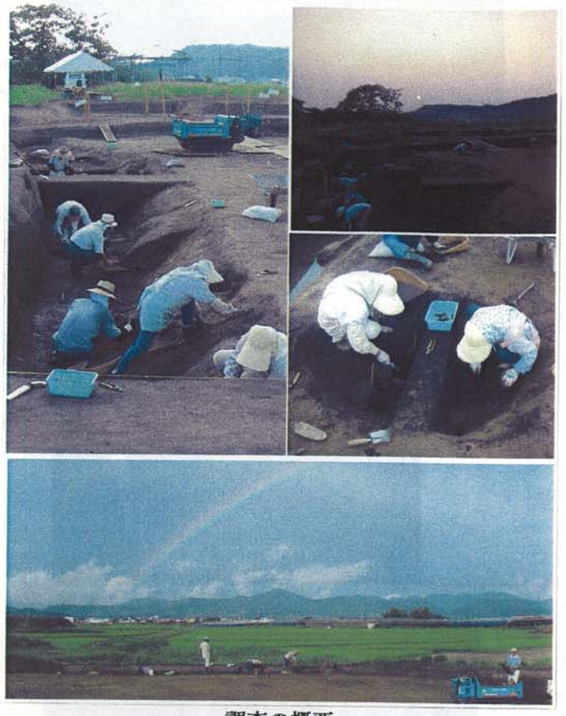
上大作裏遺跡（かみおおざくうら）発掘調査説明会資料

2006年10月28日（土）

財団法人山形県埋蔵文化財センター



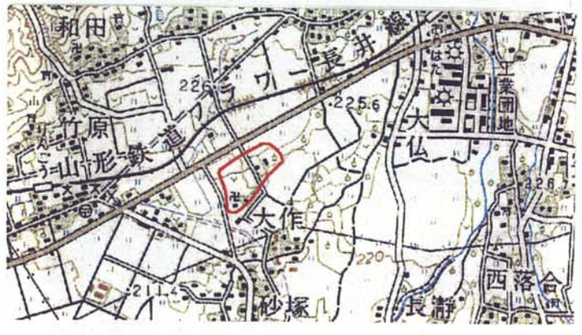
調査要項

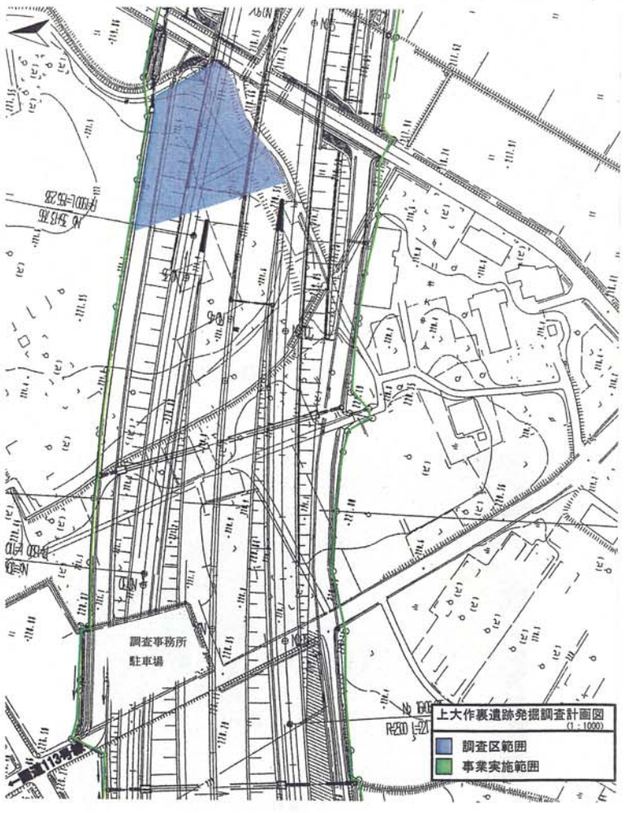
遺跡名	上大作裏遺跡
遺跡番号	平成17年度登録
所在地	南陽市大字砂塚字大作前ほか
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
調査原因	一般国道113号赤湯バイパス改築事業
調査面積	1,800㎡
現地調査	平成18年8月21日～11月9日
遺跡種別	集落跡
時代	縄文時代・弥生時代・平安時代
遺構	土坑・陥穴・畝状遺構・ピット・柱穴
遺物	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石器・木製品
調査担当者	調査第一課長　野尻　侃
	調査研究主幹　長橋　至
	主任調査研究員　須賀井新人（調査主任）
	主任調査研究員　小林圭一
調査協力	置賜教育事務所、南陽市教育委員会

調査の概要

上大作裏遺跡は南陽市街地から西方約4.5㎞に位置し、縄文・弥生・平安時代の三時期の集落跡と推測される遺跡です。その範囲は現況の地形等から推察して、広域的に河岸段丘上の東西約500m・南北約200mと考えられます。今回の調査は昨年度の試掘調査の結果に基づいて、遺跡範囲の東端域に調査区を設定し、8月21日から実施しました。調査の進行に伴って、東側および南側の段丘縁辺部に遺物を多く含む堆積層の存在が確認されたため、途中一部を拡張して調査しました。

また、今回の調査区西側で県教育委員会が試掘調査を実施したところ、約4,000㎡の範囲に遺構・遺物の散布が確認されたことから、平成19年度に第2次調査が行われる予定です。調査で得られた資料は整理作業を通じて検討を加え、次年度分と合わせて平成20年度以降に報告書として刊行されます。





検出遺構

河岸段丘の端部に設定した調査区から見つかった遺構には、縄文時代の陥穴（おとしあな）、縄文または弥生時代の土坑（どこう）やピット（柱穴）、平安時代の土坑や畝状遺構などがあります。このうち、出土遺物などから掘られた時代が明らかなものは一部に限られます。調査区内に住居跡が見当たらないことから、当地が各時代のムラの一部であったことは推測できますが、居住域は北側の微高地にある可能性が考えられます。1基見つかった縄文時代の陥穴や、平安時代の畝状遺構の存在から、当地は集落域の外縁として利用され、狩猟場や畑地であったものと思われます。

調査区東辺と南辺は段丘の縁辺に当たりますが、この端部は幅3m程にわたって埋め立てたことによってできた地形であることが分かりました。その堆積土内からは多くの遺物が見つかっており、縄文時代の土器や石器と弥生・平安時代の土器が混在して出土しました。

出土遺物

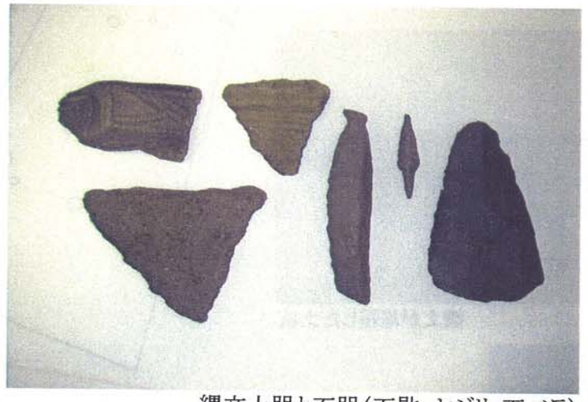
縄文土器と石器、弥生土器、平安時代の土師器（はじき）や須恵器（すえき）、それに時期不明ですが木製品が1点出土しています。これらの大半は、縁辺部の堆積層内から出土したものです。土器類はすべて破片ですが、縄文土器では文様のわかるものを観察したところ、今から約5,000年前の縄文時代前期末頃の製品と考えられます。石器には完成したものとして、狩りに使用したヤジリや土を掘るなどに使ったと思われる石ベラ、携帯用ナイフとされる石匙（せっぴ）などがあります。弥生土器は2本一対の平行沈線を引いた文様に特徴があり、約2,000年前の弥生時代中期後半のものです。平安時代の土器も器の形がわかるものはほとんどありませんが、貯蔵用の甕（かめ）や食器である坏（つき）などが認められます。縁辺部堆積層の最下層から出土した木製品は、農耕具の鍬と判断されます。

まとめ

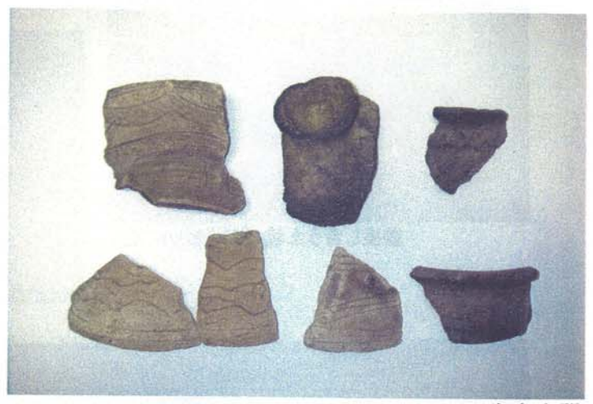
上大作裏遺跡は縄文・弥生・平安時代の集落跡です。調査の成果を要約すると以下のようになります。

発見された遺構・遺物の分布状況や地形等から、当時のムラの居住域は調査区北側に広がっていたものと考えられます。

遺物は整理箱8箱程出土量しました。中でも山形県では資料数が少ない弥生土器が多く、昨年度の調査で同じ時期の土器が一括出土した百刈田（ひゃくがりだ）遺跡との関連もうかがわれる資料を得ることができました。



縄文土器と石器（石匙・ヤジリ・石ベラ）



弥生土器

弥生土器

平安時代の須恵器

上空から見た調査区

調査区全景

重複し合う土坑（左）とピット（右）

焼土が堆積した土坑

調査区南辺の旧段丘地形

調査区北西部での調査状況

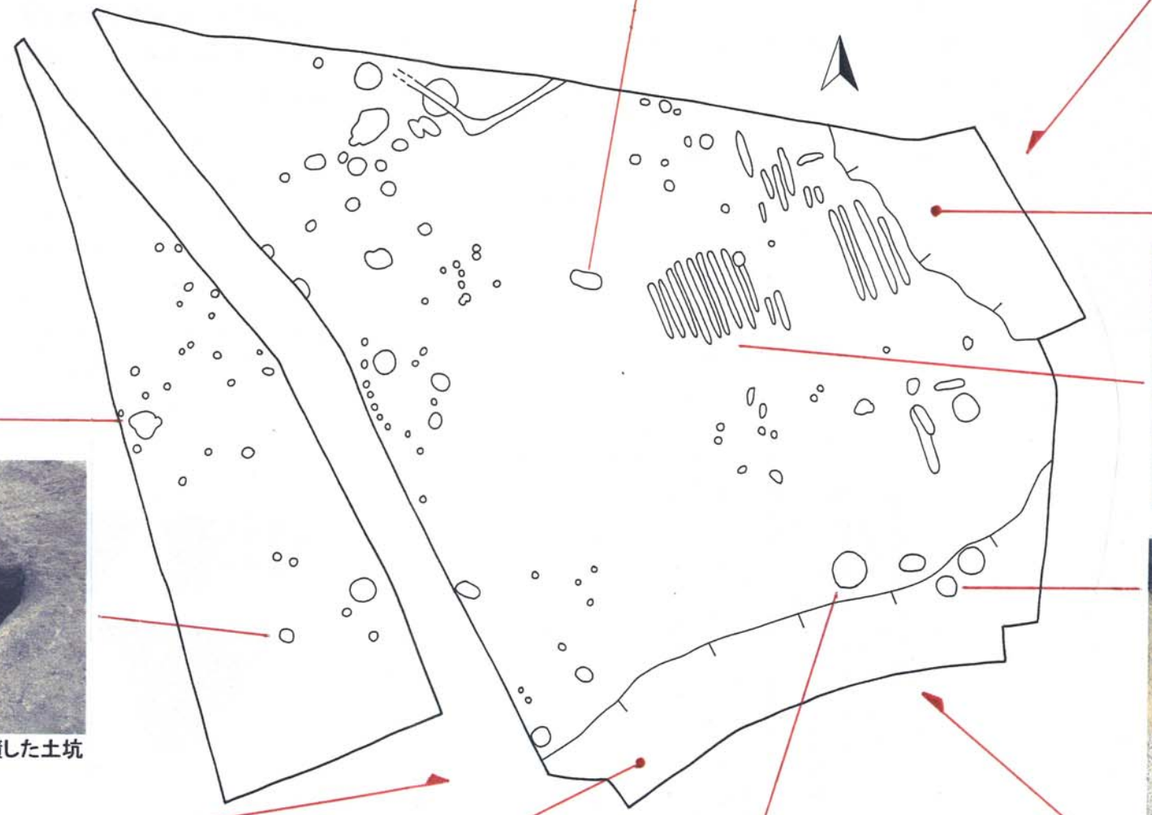
縄文時代の陥穴

調査区東端部の落ち込み

弥生土器出土状況

畝状遺構

平安時代の土坑



遺構配置図（S＝1:300）

木製鍬の出土状況

焼土が堆積した平安時代の土坑

調査区南端部の落ち込み